四箇遺跡25次調査
熊本遺跡2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告第418集

1995

福岡市教育委員会

Shi ka 四箇遺跡25次調査
Kuma moto 熊本遺跡2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告第418集

四箇25次調査番号　9409
遺跡略号　SIK-25
熊本2次調査番号　9351
遺跡略号　KMM-2

1995

福岡市教育委員会

序　文

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史遺産が残されてきました。それらを残し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私どもの務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることも事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録保存に努めております。

本書は、住宅地内道路の新設にともない調査した四箇遺跡25次、熊本遺跡２次調査の記録を報告するものです。調査では縄文時代から中世に至る遺構と遺物を発見しました。この結果、この地区の歴史、および他地域との交流についての問題についても明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くのかたがたのご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成７年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　尾　花　　剛

例　言

四箇25次

1　本項は早良区重留７丁目1068－1における住宅地建設に伴い、福岡市教育委員会が1994年度に実施した四箇遺跡第25次調査の報告である。
2　発掘調査は住宅地の道路部分について行った。
3　本項で使用する方位は磁北である。
4　遺構の実測は池田祐司、澤下孝信、坂本憲明が、遺物の実測は池田が行った。
5　写真撮影、製図は池田が行った。
6　本項に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、保管される。
7　本項の執筆、編集は池田が行った。

熊本２次

1　本項は早良区重留大字東入部１丁目1667他における住宅地建設に伴い、福岡市教育委員会が1993年度に実施した熊本遺跡第１次調査の報告である。
2　発掘調査は住宅地の道路部分について行った。
3　本項で使用する方位は磁北である。
4　遺構の実測、遺物の実測は調査担当者が行った。
5　写真撮影、製図は調査担当者が行った。
6　本項に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、保管される。
7　本項の執筆、編集は調査担当者が行った。

本文目次

第1章　四箇25次調査の記録……3
Ⅰ　はじめに……3
1　調査に至る経緯……3
2　調査体制……3
Ⅱ　調査報告……3
1　位置と周辺の調査……3
2　調査概要……7
3　遺構と遺物……7
第2章　熊本遺跡2次調査の記録……15
1　はじめに……16
2　検出遺構……18
3　出土遺物……19
4　まとめ……20

挿図目次

Fig. 1　周辺の遺跡（1/6000）……1
Fig. 2　調査地点位置図（1/10000）……2
Fig. 3　周辺測量図（1/1200）……4
Fig. 4　遺構配置図（1/300）……5
Fig. 5　土層実測図（1/80）……6
Fig. 6　出土遺物実測図（1/3）……7
Fig. 7　SK011、012実測図（1/40）……8
Fig. 8　河川 SD013実測図（1/40）……9
Fig. 9　SK009、015実測図（1/40）……9
Fig. 10　出土遺物実測図（1/2、1/1）……10
Fig. 11　熊本遺跡2次調査区位置図（1/1000）……17
Fig. 12　検出遺構実測図（1/40、1/60）……18
Fig. 13　出土遺物（1/3）……19
折り込み　熊本遺跡2次調査遺構図（1/150）

図版目次

Pl. 1	(1) 1区全景（西から）	(2) 2区全景（南から）
Pl. 2	(1) 河川001（西から）	(2) 河川013（東から）
	(3) 河川013北壁（南から）	(4) 河川013杭（東から）
Pl. 3	(1) SK009（北から）	(2) SK015（南から）
	(3) SK011、012（南から）	(4) 石斧出土状況（北から）
Pl. 4	出土遺物	
Pl. 5	調査区より飯盛山をのぞむ	2次調査区全景（西より）
Pl. 6	西側調査区（東より）	SX-06·07全景（北より）
Pl. 7	最奥部調査区（北より）	
Pl. 8	発掘作業風景（西北より）	SP-103 土師坏出土状況（北より）
Pl. 9	SX-03 検出状況（北より）	
Pl. 10	出土遺物	

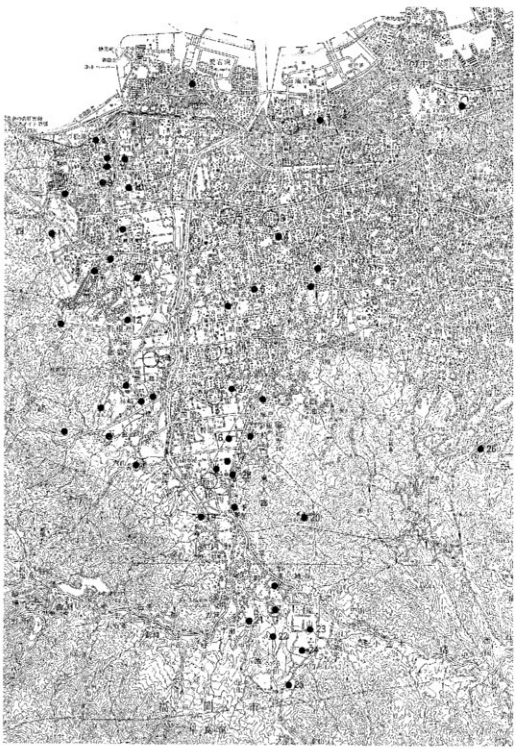


Fig. 1　周辺の遺跡（1/6000）

Fig. 2　調査地点位置図（1/10000）

第１章　四箇25次調査の記録

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経緯

早良平野のほぼ中央に位置する四箇遺跡群では、1975年以来24次の調査が行われている。

平成６年２月、森田道弘氏より早良区重留７丁目1068－１における住宅地造成に伴う埋蔵文化財事前調査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は四箇遺跡22、23次調査地点に接し24次調査地点に隣接しているため、平成６年２月12日に試掘調査を実施した。その結果遺構を検出したため申請者と協議を行った。その結果、予定されている建造物が木造の一般建築であるため、取付道路となる箇所を永久構造物とみなして発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成６年４月17日から行い、平成６年５月21日に終了した。工事に係わる面積は2797㎡であり、調査面積は522㎡である。

また発掘調査にあたっては森田道弘氏をはじめとして、関係各位には多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表します。

２　調査体制

調査委託　株式会社 鴻池組 九州支店　森田道弘
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　尾花剛
調査総括　文化財部長　後藤直
　　埋蔵文化財課長　折尾学
　　埋蔵文化財課第１係長　横山邦嗣
調査庶務　埋蔵文化財課第１係　吉田麻由美
試掘担当　埋蔵文化財課第１係　菅波正人
調査担当　埋蔵文化財課第１係　池田祐司
調査員　澤下孝信、坂本憲明
作業員　青柳寿子、青柳美智子、因ヨシ子、海津宏子、倉光アヤ子、栗木和子、坂原美佐子、高橋茂子、長谷川律子、土生嘉代子、広瀬梓、細川友喜、真名子シズエ、三谷朗子、溝田雅子、三好道子
整理作業　上田保子、前田みゆき

Ⅱ　調査報告

１　位置と周辺の調査

四箇遺跡群は、福岡市の西効早良平野に位置し、平野を北流する室見川中流域右岸の沖積微高地（海抜22ｍ前後）上に展開する。本遺跡群は東西800ｍ、南北500ｍにひろがり、東半部には東西方向に幅広い埋没流路が走り遺跡群を分けている。

本調査地点は、遺跡群の中でも東端に位置する。近年の造成以前は水田で、標高21ｍを測る。隣接して第22次、23次、24次調査が行われている。各調査地点では弥生時代前期末、古墳時代後期の河川が、また第22次では縄文時代中期の包含層が検出されており同様の遺構、遺物の広がりが予想された。

Fig. 3　周辺測量図（1/1200）

0　50m

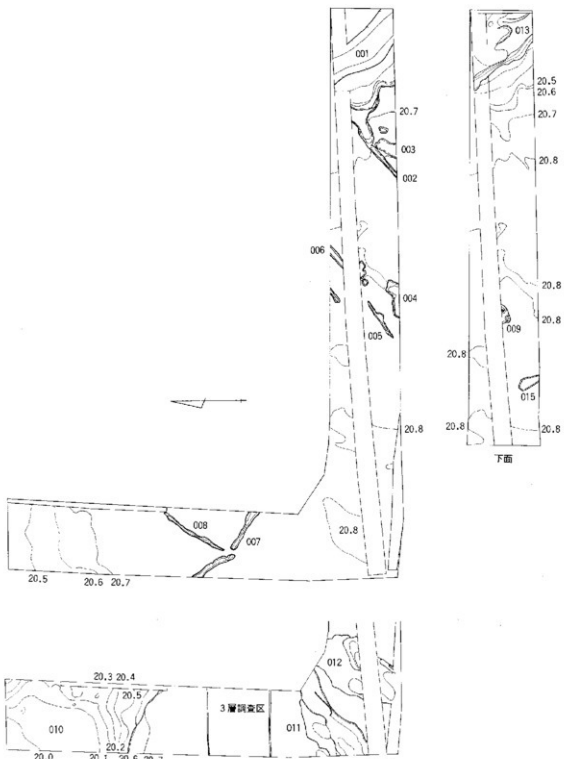


Fig. 4　遺構配置図（1/300）

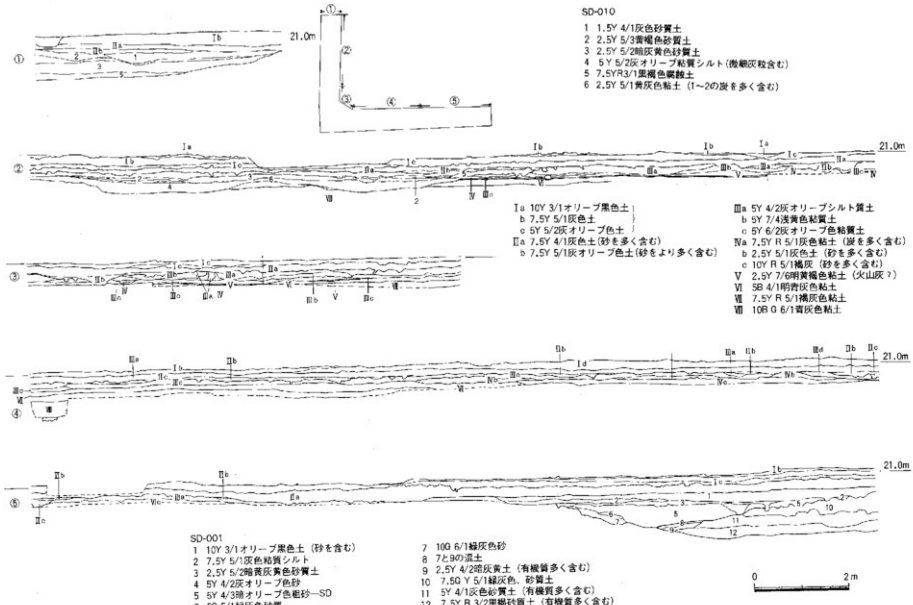


Fig. 5 土層実測図 (1/80)

2　調査の概要

調査区は、永久構造物となる５ｍ幅の道路部分である。まず南側に隣接する23次調査地点において歴史時代の溝、水田が検出された黄褐色系の３層上面まで重機で下げた。層序は1.8ｍの客土の下に第１層旧耕作土、第２層黒褐色土、第３層黄褐色土である。調査区全面に広がる第２層は、水田耕作土の可能性もあるが、畦畔等は検出できなかった。一部手掘りで下げ、中世の遺物が出土している。第３層上面では多数の足跡（牛等）状のくぼみ、溝、土坑等を検出した。調査区の東端には SD001とそれに切られる SD013が検出された。また SD004から008は灰白色の粗砂を埋土とする溝である。全体図（Fig. 2）では以上のうち SD013を除いたものを便宜的に上面の遺構として示している。調査区北端では第２層下、３層上に緩やかな落ちが見られ SD010とした。また第３層のうちややシルト質で灰色を帯びる３ａ層がくぼみ状になる部分を SK011、012とした。以上と SD013を下面の遺構として図示している。第３層以下は第４層灰色粘土、第５層明黄褐色粘土、第６層暗青灰色粘土、第７層褐灰色粘土、第８層青灰色粘土と続くが、一部トレンチをいれた結果、遺物の出土はなかった。

3　遺構と遺物

1）足跡状遺構

第３層上面で検出した。10㎝から25㎝大の不整円形、楕円形のくぼみが調査区全域に広がっている。深さはまちまちで５㎝ほどのものから15㎝を測るものがある。覆土は第２層である。第22次調査時に検出された足跡と一連のものと思われる。水田に伴うものと思われるが区画等はわからなかった。遺物は２層全体では縄文時代の粗製土器、古式土師器、須恵器等が出土している。わずかであるが中世と思われる土器片が出土している。

１から８は２層から出土した。１と２は須恵器の杯蓋である。１は３㎜大までの大きめの砂粒を非常に多く含む。天井下部顕著な段がつき、ここで粘土を接いでいる。回転なで調整を施している。２は天井部をなで調整の後、一部削り調整を施している。砂粒をわずかに含む。３は須恵器の口縁部片で壺になるものか。外面下部には掻き目がみられる。４は口縁部が立ち上がり口縁帯状を呈す。外面なで調整、内面刷毛目調整を施す。外面は淡灰色、内面は暗褐色を呈す。５は甕の口縁部で外面に刷毛目を施す。６はレンズ底を呈す底部で、外面は刷毛目、内面は板状工具による調整痕がある。７は突帯が剝げたもので小ぶりの刻目が施される。８は甕の口縁部である。１㎜大までの砂粒を含む。淡

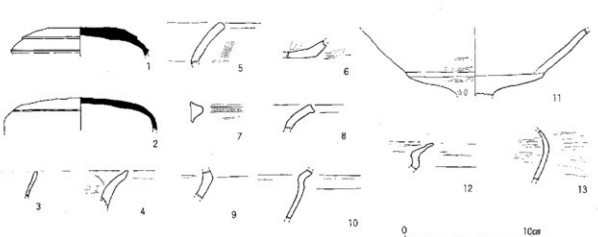


Fig. 6　出土遺物実測図（1/3）

灰色を呈す。9は浅鉢の屈曲部である。1㎜大までの砂粒を多く含む。器面が粗れており調整は不明だが精製品ではない。10は浅鉢で2㎜大までの砂粒を多く含む。器面は粗れており調整不明。

2）溝

SD003　調査区東側に北東に直線的に走る。底の部分の検出と思われ、幅30㎝、深さ2から5㎝が残るのみである。覆土は灰白色の粗砂である。第22次調査のSD002との関連が考えられる。遺物は出土していない。

SD005　幅30㎝、深いところで6㎝の溝で、底のみが残ったと考えられる。覆土は第2層と同様の黒褐色土である。第22次調査のSD015とつながる可能性がある。遺物は出土していない。

SD007　幅40㎝、深さ10㎝を測る溝で壁は急に立ち上がる。底には足跡状のくぼみが多く見られる。覆土は粗砂である。SD008と接する個所で途切れる。遺物は弥生土器、土師器と思われる小片、黒曜石が出土している。

SD008　幅30㎝、深さ10㎝を測る溝でSD007とほぼ直交する方区に走る。底は足跡状のくぼみが多く見られ、覆土は粗砂である。遺物は出土していない。

3）河川

調査区の東端と北端で落ちを検出した。東端のSD001とD13は同一の流路の可能性もある。

SD001　2層下調査区の端まで暗褐色の粗砂まじり土が堆積し、その下に幅5.5m、深さ40㎝に粗

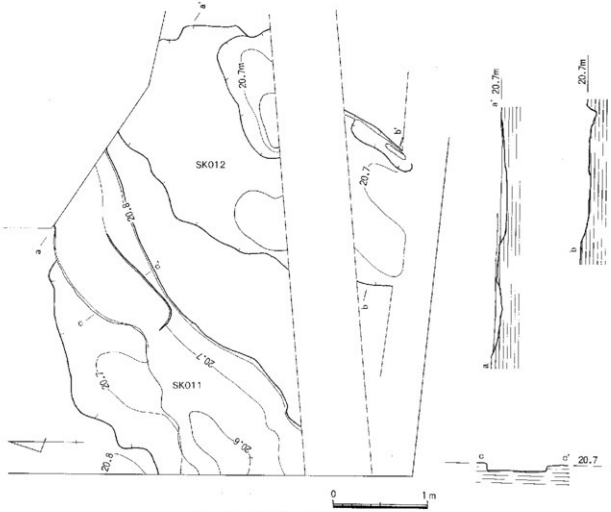


Fig. 7　SK011、012実測図（1/40）

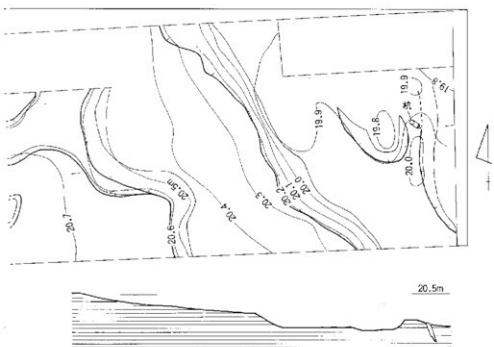


Fig. 8　SD013実測図（1/40）

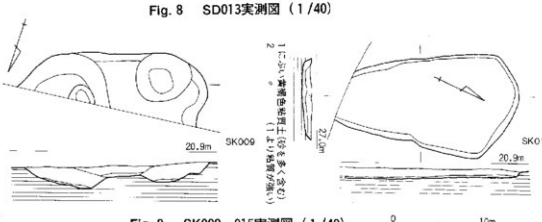


Fig. 9　SK009、015実測図（1/40）

砂がレンズ状に溜まる。土層図（Fig. 5）では5層にあたる。弥生土器片が出土した。

SD013　SD001の下層に見られる落ちで対岸は調査区外と思われる。本質等の有機質を含んだ暗褐色土砂質土、灰色砂質を覆土とする。（6層以下）底に1本の杭が打ち込まれた状態で出土した。遺物は縄文土器の小片が出土したのみである。24次調査1区のSD001に方向、位置的にはつながる可能性があるが距離がありすぎ、関係は不明である。遺物は土師器とも弥生土器とも判別がつかない破片、縄文土器、石鏃が出土した。12、14、17~20がSD013出土である。12は浅鉢で2㎜大までの砂粒を多く含む。研摩調整を施す。14は風化度の強い安山岩製の磨製石斧で浅い敲打痕が全面にみられる。17~20は石鏃で17、18は安山岩、19、20は黒曜石である。

SD010　2層の下に1層は砂質の灰色土、薄い有機質層を挟んで暗褐色粘土層が堆積する。浅いなだらかな落ちで、流路と言うより溜まり状になるものと思われる。遺物は出土していない。

4）土坑

SK009　やや灰色をおびた黄褐色土を覆土とし、長方形になると思われる。試掘トレンチに切られ

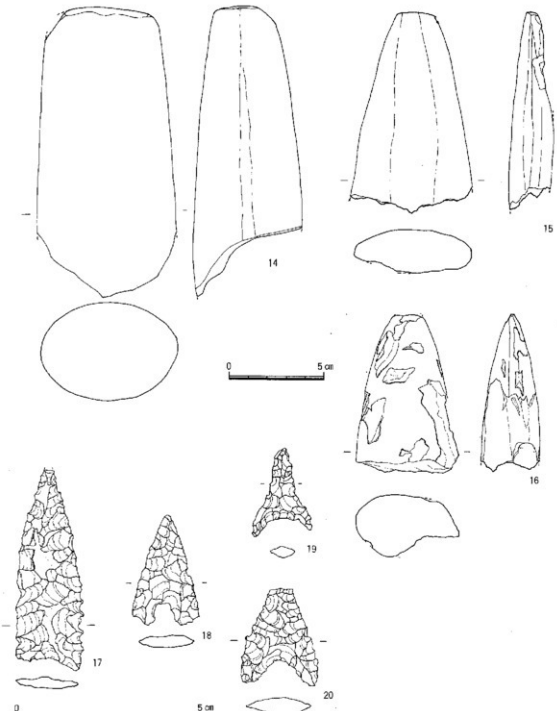


Fig. 10　出土遺物実測図（1/2、1/1）

ており、北半は不明である。SK011等と覆土が似ている。遺物の出土はない。

SK011　溝状の浅いくぼみでやや灰色をおびた黄褐色土（Ⅲａ）層を覆土とする。上坑とするには難があるかも知れない。一部炭の小片が集中する個所が見られた。13が出土した。球形の胴部を持つ黒川式の胴部である。砂粒をほとんど含まない精良な胎土で、内外面とも研摩調整を施す。他に粗製土器片が20点、黒曜石片１点が出土している。

SK012　SK011と同様のくぼみである。遺物は縄文土器片が１点出土している。

SK015　長さ２ｍ強、幅１ｍの浅いくぼみで、SK011と同様の覆土である。遺物の出土はない。

図　　版

(1) 1区全景（西から）

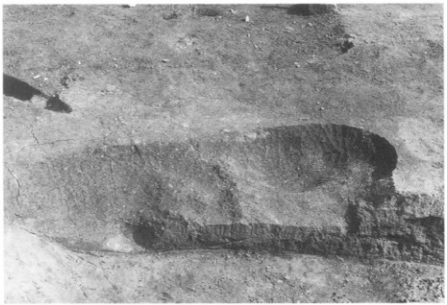
(2) 2区全景（南から）

(1) 河川 001（西から）

(3) 河川 013 北壁（南から）

(2) 河川 013（東から）

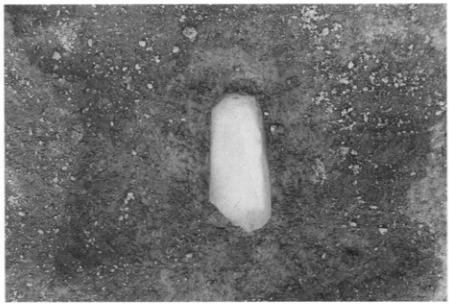
(4) 河川 013 杭（東から）



(1) ＳＫ 009（北から）

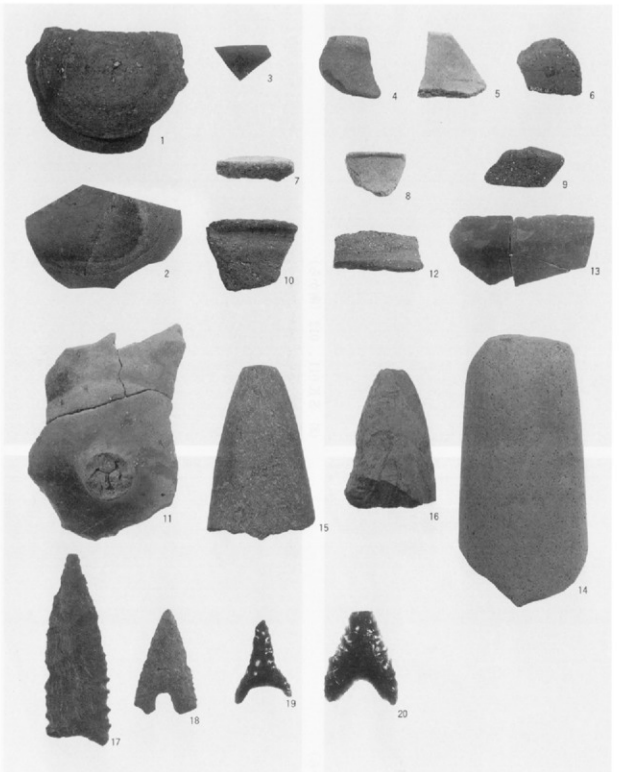
(3) ＳＫ 011、012（南から）

(2) ＳＫ 015（南から）



(4) 石斧出土状況（北から）

PL. 4



出土遺物

第２章　熊本遺跡２次調査の記録

熊本遺跡群２次調査風景

9350　熊本遺跡群２次　(KMM-2)
所在地　早良区大字東入部１丁目1667他　　調査面積　250㎡
調査原因　宅地造成　　調査期間　931209～940114
処置　調査後破壊

Ⅰ．はじめに

位置・環境　調査地は、早良平野の南端部に位置する。標高33m前後である。調査区の旧況は畑地で、客土がなされていた。これまでの調査で中世の集落跡が確認されている。今回の調査区は宅地の取付道路となる部分である。

調査委託
福岡市南区長丘５丁目26番３号
株式会社エステイ・アナイ
代表取締役　穴井　常雄

調査主体
福岡市教育委員会　埋蔵文化財課
調査総括
埋蔵文化財課長　折尾　学
埋蔵文化財第一係長　飛高憲雄（前）　横山邦継（現）
試掘調査
菅波正人
庶務　　吉田麻由美
調査担当　　埋蔵文化財第一係　常松幹雄

調査・整理参加者
池田由美・衛藤美奈子・菊池栄子・鳥井原良治・原美晴・平野義雄・船越恒人・
堀本歳四郎・吉川順岳・脇坂レイコ

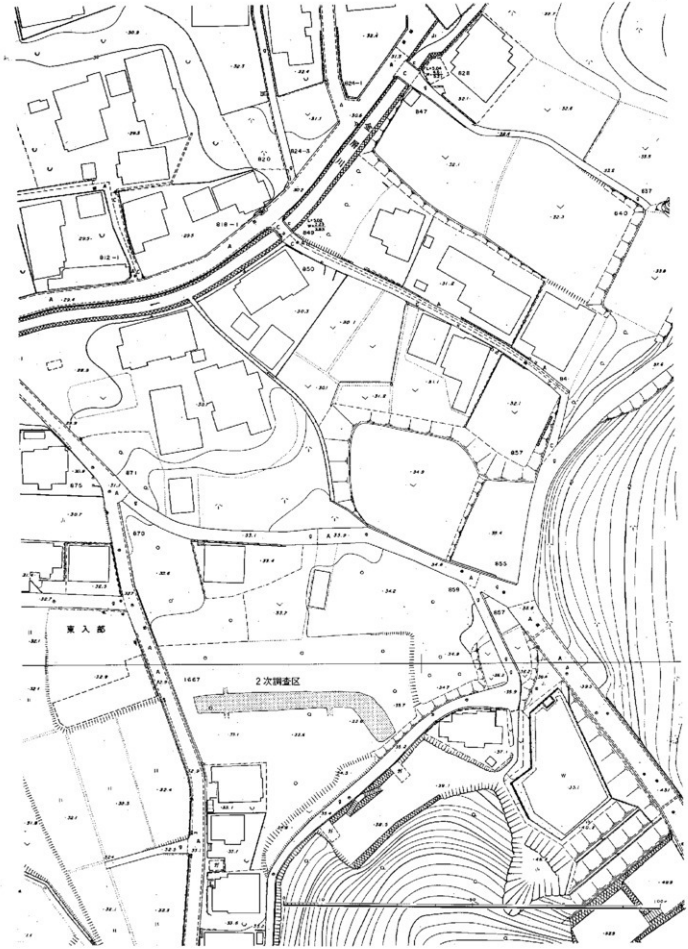


Fig. 11　熊本遺跡 2 次調査区位置図（1 /1000）

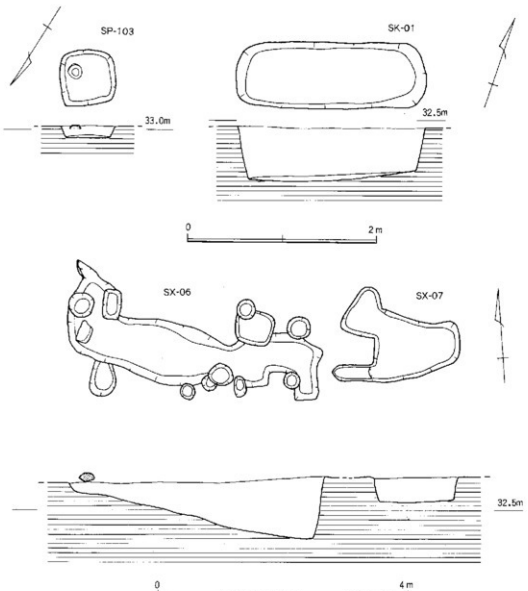


Fig. 12　検出遺構実測図（1/40、1/60）

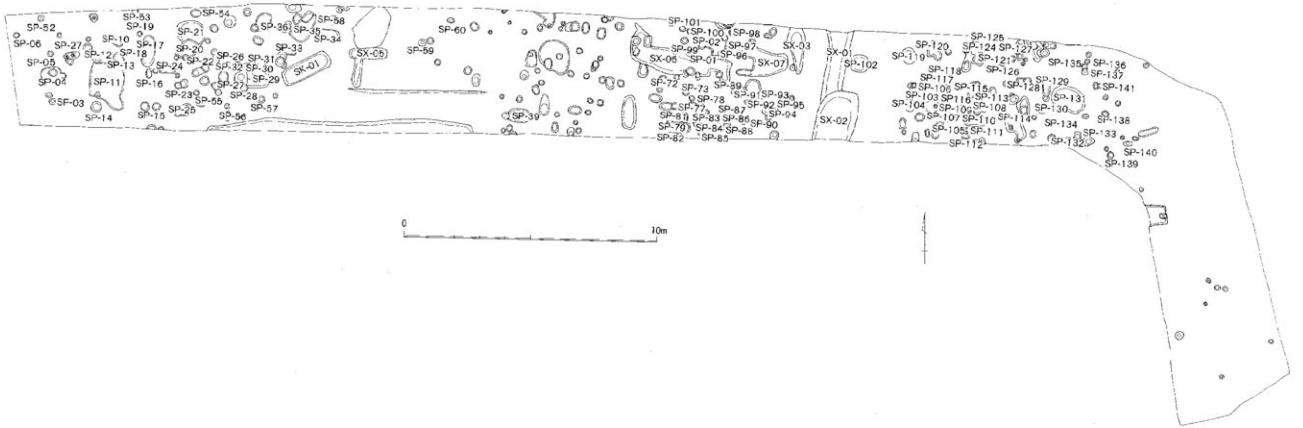
2．検出遺構

柱穴が密集して検出されたが、幅4mで全長60mという狭長な調査区であったため性格を明らかにしえなかった。遺物が検出された柱穴は、141にのぼるが土坑は、不整形なもので占められていた。

SP-103　調査区の東寄りで検出された方形の掘型をもつ土坑。土師器の杯が底から浮いた状態で検出された。

SK-01　調査区の西側で検出された。長軸2.02m×短軸0.71mで深さ0.32mの土坑である。時期の決め手になる遺物は検出されかった。

SX-03　不整形な土坑である。この付近から鉄滓が検出された。時期の決め手になる遺物は含まれていなかった。



熊本遺跡２次調遺構位置図（１/150）

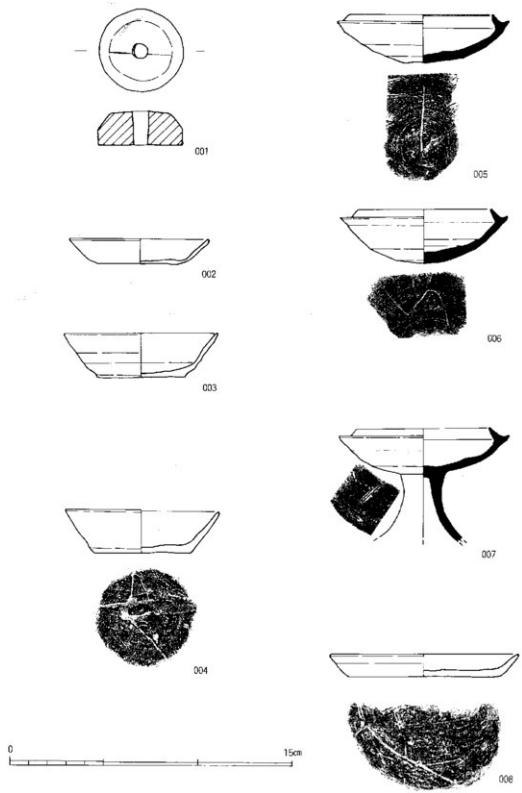


Fig. 13　出土遺物（1 / 3）

3．出土遺物

遺物は土師器や陶磁器の細片が主体をなす。コンテナ10箱。何れも細片が多く遺構の時期を決めがたい。

001は、滑石製の紡錘車である。直径4.5cm、厚さ1.8cmをはかる。SP-01出土。

002は、糸切り底の土師皿で、口径11.1cm、底径6.3cmをはかる。胎土に赤褐色の粒子を含む。淡褐色で口縁の内側に煤を付すことから、燈明皿とおもわれる。SP-27出土。

003は糸切り底の土師皿で、口径12.1cm、底径7.0cm、高さ3.5cmをはかる。SP-37出土。

004はヘラ切り底の土師杯で、口径11.8cm、底径8.0cm、高さ3.4cmをはかる。奈良時代末に比定される。SP-103出土。

005は、須恵器の杯身口径11.6cm、高さ3.8cmをはかる。底部にヘラ記号がみられる。

006は、須恵器の杯身口径10.9cm、高さ4.3cmをはかる。底部にヘラ記号がみられる。

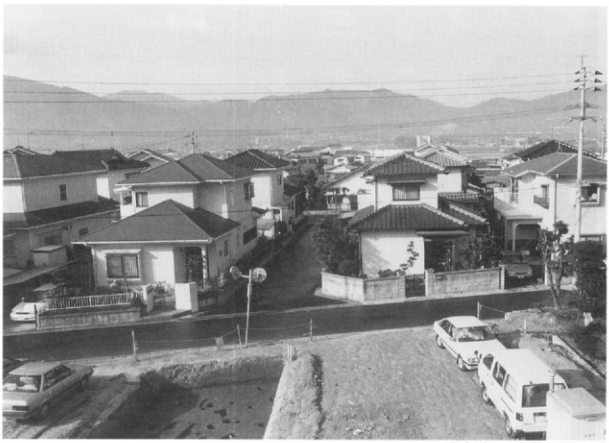
007は、須恵器の高杯で、口径10.8cm、現存高13.7cmをはかる。底部にヘラ記号がみられる。以上の須恵器は、包含層から出土した。

008は、へら切り底の土師皿で、口径15.2cm、底径1.8cmをはかる。奈良時代末に比定される。

4．まとめ

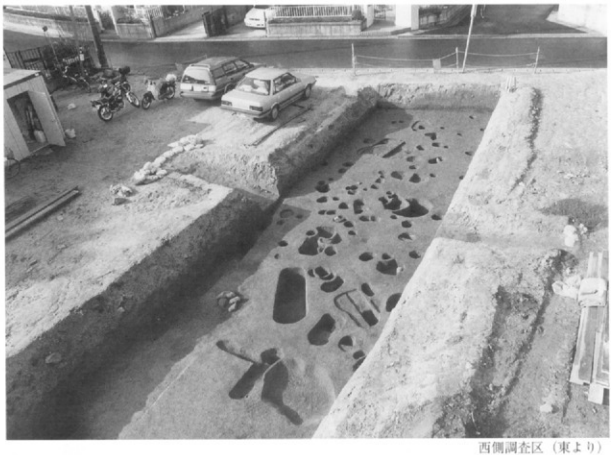
今回の調査は遺構の広がるを確認するにとどまった。遺構の時期は古墳時代末～奈良時代、そして中世を主体とするものと推定される。

図　版



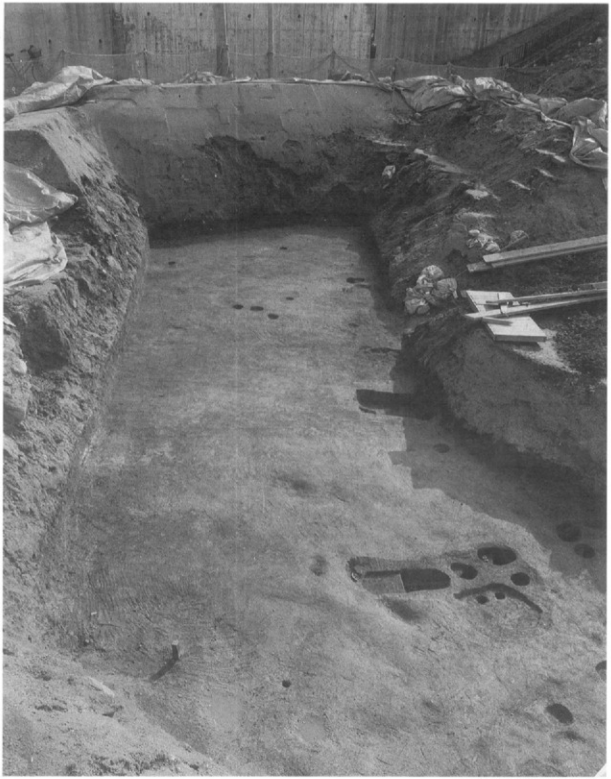
調査区より飯盛山をのぞむ

2次調査区全景（西より）



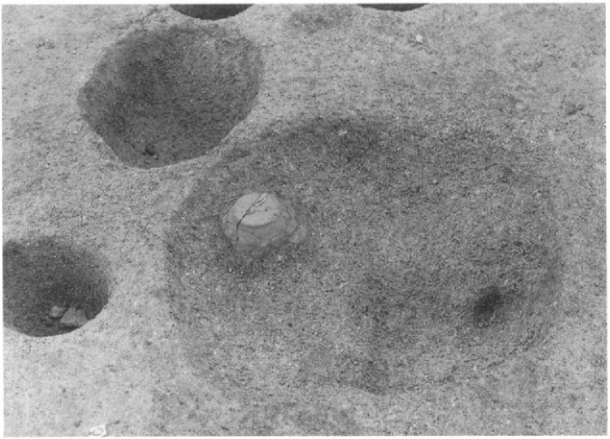
西側調査区（東より）

SX-06・07全景（北より）

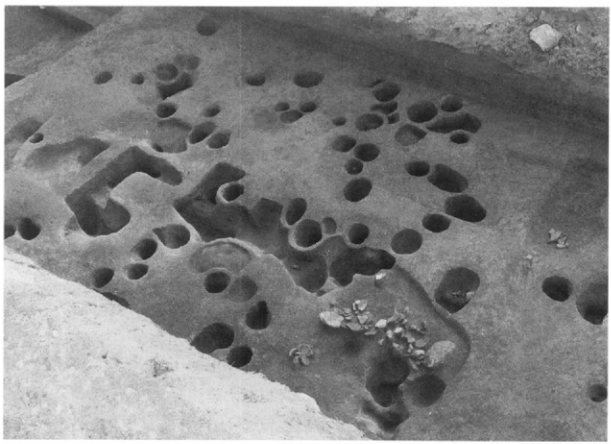


最奥部調査区（北より）

発掘作業風景（西北より）

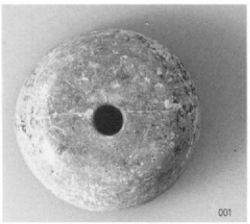


SP-103 土師坏出土状況（北より）

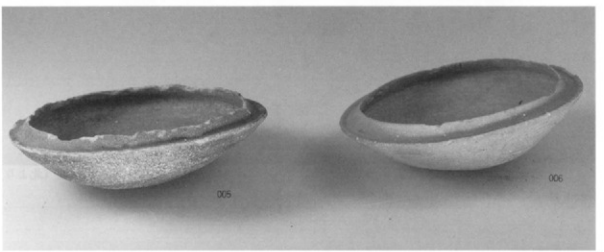


SX-03 検出状況（北より）

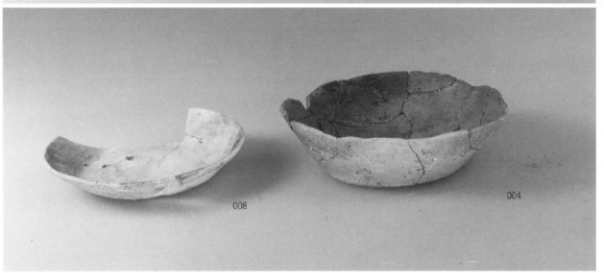
PL.10


001

007


005

006


008

004

出土遺物

四箇遺跡　25次調査
熊本遺跡　2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第418集

1995年（平成7年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　セントラル印刷株式会社
〒810 福岡市中央区大宮1丁目5番13号